

# 戦後70年 生きる伝える

## 第4回 学校②

1945年8月15日、太平洋戦争の終戦を迎え、ことし、その日から70年の年月を経ました。終戦直後に生まれた人も70歳という年齢を迎え、戦争の記憶も薄れていくばかりです。幼い頃に戦争を体験した成田市平和啓発推進協議会・戦争の語り部の皆さんから当時の生活の様子を聞き取り、今後、二度とあのような悲惨な戦争を繰り返さないため、ここに紹介することとなりました。

### 師

師範学校は、高等小学校・女学校・中学校卒業が入学資格で、小学校の教師を養成するための学校であった。卒業後、教職に就くことを前提にしているため授業料が掛からず、寄宿舎での生活のため、食糧などに不自由することなく、勉学にいそむことができるはずだった。

しかし、戦争が激しくなると学徒動員で男子も女子も航空会社などの軍需工場に勤めなければならなかった。工場では、女子は3交代制で深夜でも機械は止まることはなかった。さらに学校にも工作機械が持ち込まれ、学校が工場と化していった。造ったのは戦闘機の精密部品。油まみれになり、空腹に耐えながらも、お国のためと思いつつ一生懸命造った。ミリ単位の緻密な作業、少しでもずれると不良品になってしまう。このとき初めて、失敗した品物のことを「おしゃか」ということを覚えた。

農村部では男手が足りなくなり、農作業もままならない。そのため、女学校の生徒たちは勤労奉仕として農家を手伝った。当時、千葉師範学校女子部の2年生だった日暮淑<sup>よし</sup>さんは、海上郡滝郷村（現在の旭市）に共同炊事の手伝いに借り出された。3人くらいずつ一週間ほど農家に分宿し、朝夕のご飯を炊いて農家に配るのだ。一度の炊き出しの米の量は約14キログラム。今のように無洗米などあるわけではなく、これだけの量の米を研ぐのも一苦労だ。水は井戸から桶で運ぶ。天秤棒で担ぐため水の重さで棒が肩に食い込む。慣れないとピッチャン、ピッチャンとこぼれてしまう。背の小さい人は桶が地面に着いてしまい担ぐこともできない。ようやく研いだ米を炊き上げるのだが、



鍬やスコップを手に働く女学生（成田の歴史アルバムより）

土を突き固めて作った大きなかまどに一斗吹き用の巨大な鉄釜を乗せなければならない。か弱い女学生達にとってはそれが重労働だった。3人がかりでやっとのことで持ち上げる。一度に14キログラムもの大量の米を炊かなくてはならないため、満遍なく火が回らないと「がんだ飯（芯が残ったご飯）」になってしまう。ひとときも息を抜くことはできない。失敗すれば水を足し炊き直す。すると今度はお粥<sup>かゆ</sup>のようにベチャベチャになってしまう。慣れない作業に女学生達は悪戦苦闘の連続だった。それでもなんとか役目を果たしたときには、ほっとしたのを覚えている。

女学生達の年齢は16～20歳くらい。今の高校生から大学生の年頃。おしゃれもしたかったであろう。しかし、着るものは着物にもんぺ。そんな中でも、もんぺの裾を広げたり、着物と柄を合わせたり、それがささいなおしゃれだった。来る日も来る日も教室でミシンを踏んで軍服を縫い、食糧を確保するための畑仕事で肥を担いで鍬<sup>くわ</sup>を振るい、軍需工場でおまみれになりながら旋盤を回した。勤労奉仕の合間には、敵兵が上陸してきたときに備え竹槍やバケツリレーの訓練。日曜日は休日だが、疲れ切って何もできない。洗濯、掃除など身の回りのことをするのが精一杯だった。

当時女学校へ通っていた人たちは、ほとんど授業らしいものを受けた記憶がないという。

今の時代、学校へ行くのは当たり前の中である。戦争当時、勉強をしたくてもできなかった学生たちがいたことなど想像もできないだろう。今、自分たちがどれだけ恵まれた環境の中にいるのか。あらためて考えるときが来ているのではないだろうか。

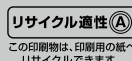
## 編集後記

11月1日号の特集は読んでいただけましたか。担当職員は数カ月前から内容を練り、取材を重ね、原稿を書いていた。プレッシャーから夜も眠れず、食事もろくに取れなかったことだろう。毎日、真剣に取り組み、悩む姿を見ながら何も声を掛けられませんでした。出来上がった作品は、その努力の賜物。この姿を糧に、広報担当職員一同はこれからもより良い広報紙を皆さんにお届けできるよう努めてまいります。

平成27年11月15日号 No.1303

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD（ユニバーサルデザイン）フォントを使用しています。